

## 平成 25 年度みんぱく若手セミナー 発表要旨

氏名：古沢ゆりあ 所属：総合研究大学院大学

題目：フィリピンの聖母崇敬と聖画像の現地化

要旨：

本発表は、フィリピンの宗教美術における聖母像を対象に、聖母崇敬における聖画像の形と役割を通して、西洋由来の図像の受容と変容（現地化）の諸相をさぐるものである。聖母像の図像学自体の研究は、先行研究において西洋美術史学を中心に大きな蓄積と成果があるが、聖母図像がアジアなど非西洋社会でいかに受容され、特に近現代においていかに展開しているかに関する研究は比較的歴史が浅く課題も多く残されている。本研究では、フィリピンでの聖母像の受容と、東西の視覚表象の融合であると考えられる「聖母像の現地化」に注目することで、文化の受容変容と、視覚表象における戦略の観点から美術作品をとらえようとする。

まず背景として、フィリピンは 16 世紀半ばよりスペインによって植民地化とキリスト教布教が行われたことで、現在も人口の約 8 割がカトリックであり、聖母崇敬が盛んで文化の中で占める位置づけも大きい。人々の宗教実践のなかで、歴史的な由緒ある聖像から大衆的な大量複製の宗教画像まで、聖母像をはじめ聖画像はなくてはならぬものとなっている。

発表の前半では、フィリピンにおける聖母崇敬の歴史と、西洋キリスト教図像の移植について、植民地時代の歴史記録と、現存する聖画像からたどる。最古のマリア像は、16 世紀前半にもたらされたものとされ、以降、スペイン・バロック様式の聖画像が主流となり現地制作も行われる。布教において聖母崇敬が積極的に用いられたこと、当時は教会が宗教美術を統制しており西洋キリスト教美術の図像は規範としての力を強くもつものであったことがわかる。

そして、現在のフィリピンの聖母崇敬のありようをフィールドワークで得たデータと事例からみしてみる。聖母崇敬が盛んなフィリピンでは、各地に由緒ある聖母像が伝わる。それらはそれぞれ「～の聖母」といった特定の名前と、聖地（巡礼地）、祈禱文、祝祭日、奇跡譚などをもち、人々の崇敬を集めている。人々にとって聖母とは「みんなのお母さん」であり、神との仲介をしてくれる存在と考えられており、その聖母に祈願や感謝をする際に聖画像は重要な媒体となる。

発表後半では、聖母像の現地化のひとつである「民族衣装をまとった聖母」像について考える。民族衣装をまとった聖母像とは、20 世紀以降アジアの各地で民族意識を反映して成立した、土地の女性の容顔で土地の伝統衣装をまとう聖母の絵画や彫刻である。西洋図像が強く規範として続いているフィリピンにも、事例は少ないものの存在している。フィリピンの衣装をまとう聖母像は、とりわけ祖国に関する祈願（支配抑圧からの解放、社会の刷新など）を仲介する存在とされ、フィリピン文化における理想の母親像が投影されているものもある。それ以前の状況的な現地化とは異なり、それらには、ポストコロニアルの近代国家における民族的伝統の視覚表象としての民族衣装とそれをまとう女性像、また、他者からのまなざしに應えるものとしての自文化表象のあり方が見てとれる。